「徐京植さんを偲ぶ会」の記録

早尾貴紀，李杏理，戸邉秀明（編）

2023 年 12 月 18 日，作家で東京経済大学名誉教授の徐京植さんが逝去されました。

徐さんは，東アジア冷戦下の在日朝鮮人が直面した厳しい現実をふまえ，長きにわたって鋭い考察と批判を展開され，世界に警鐘を鳴らしました。深い教養に裏打ちされた徐さんの批評活動は，状況や歴史だけでなく，文学や美術・音楽など芸術全般にわたり，多くの読者を惹きつけてきました。また東京経済大学（以下，本学）では 20 年余り人権論や芸術学を講じられ，多くの学生に生きる指針を与えてくださいました。

その徐さんとの思い出を共有し，在りし日の徐さんを偲ぶ場とすべく，2024 年 4 月 20 日，本学の進一層館・進一層ホールにて，「徐京植さんを偲ぶ会」を開催しました（主催：本学教職員有志）。当日は，岡本英男本学学長による開会挨拶に始まり，以下の方々によるご登壇，ご発言をいただきました（敬称略，以下同）。

徐　勝　（又石（ウソク）大学校碩座教授，東アジアの人権と法）
宋 連 玉（青山学院大学名誉教授，朝鮮近現代ジェンダー史）
鵜飼　哲（一橋大学名誉教授，フランス現代思想・文学）
高橋哲哉（東京大学名誉教授，哲学）
真鍋かおる（「高文研」編集者）
澁谷知美（東京経済大学教授，社会学・ジェンダー研究）
李 静 和（成蹊大学教授，政治思想）
鎌倉英也（NHK エグゼクティブディレクター）
崔 在 爀（「聯立書架」編集者，翻訳家，美術史家）
大田美和（中央大学教授，歌人，英文学）
李 杏 理（東京経済大学専任講師，在日朝鮮人・朝鮮ジェンダー史）
早尾貴紀（東京経済大学教授，パレスチナ／イスラエル研究）
舩橋裕子（ご遺族）

このうち，徐勝さん，崔在爀さんは，事前に収録したビデオメッセージによるご登壇となりました。また鎌倉英也さんのご発言の前には，徐さんの生前最後に収録されたインタビューを含む映像を参会者にご覧いただきました。以下の鎌倉さんの発言記録の冒頭は，その視

聴を受けた始まりとなっています。

当日は200名近い方々にご参集いただきましたが，その後も多くの問合せがあり，ご参加のみなさまからも記録化の要望をいただきました。そこで，『東京経済大学　人文自然科学論集』編集委員会のお許しを得て，「偲ぶ会」で登壇された方々の当日のご発言を，ここに採録します。採録のための活字化にあたっては，各自の文責において，必要な範囲で加筆修正をしていただきました。また読者の参考となるよう，ご発言で挙がった徐さんの著作については，編者が書誌情報を適宜補った箇所があります。なお，登壇者のうち，李静和さんのご発言については，「偲ぶ会」の場かぎりにとどめたいとのご意向で，今回は採録していないことをお断りしておきます。

また当日会場で配布した資料には，徐さんの略年譜・主要著作・主要出演映像作品一覧や徐京植さんの絶筆となった『私のアメリカ人文紀行』（韓国で2024年刊行）の「あとがき」などのほか，以下の方々から頂戴した追悼メッセージを掲載することができました。ここにお名前を掲げ，あらためて御礼を申し上げます。

韓 承 東（元『ハンギョレ新聞』記者，作家・翻訳家）
佐喜眞道夫（佐喜眞美術館館長）
増田常徳（画家）
古川美佳（朝鮮美術文化研究）
金 富 子（東京外国語大学名誉教授，植民地朝鮮ジェンダー史研究）
丸川哲史（明治大学教授，東アジア文化論）
中村一成（ジャーナリスト）
高 和 政（中央大学附属高等学校教員，元東京経済大学非常勤講師）
崔 徳 孝（米・メリーランド大学カレッジパーク校助教授，東アジア国際関係史）
池 允 学（東京経済大学卒業生）
濱村美郷（東京経済大学卒業生：徐京植ゼミ，在ソウル）
権 赫 泰（韓国・聖公会大学教授，日韓関係史・日本現代史）

加えて，関連する行事として，2024年4月17日に本学図書館にて開催した「TKU Lunch-time Session Vol.13　徐京植先生の著作に触れる」（主催：本学図書館）についても，ご紹介いたします。当日は，以下の方々から，徐さんの著作の魅力についてお話しをいただきました。

米山高生（東京経済大学前図書館長・元教授，一橋大学名誉教授，保険論・経営史）
本橋哲也（東京経済大学教授，カルチュラル・スタディーズ）

大久保奈弥（東京経済大学教授，生物学）
笠原士織（東京経済大学 AV センター職員）

最後になりましたが，以上の「偲ぶ会」等の開催にご協力をいただいた学内外のみなさま，ご登壇をいただきましたみなさま，とりわけご遺族である舩橋裕子さんならびに徐勝さんに，重ねて御礼を申し上げます。

京植を悼む

徐　勝

昨年，京植（キョンシク）の突然の訃報に接し，いちばん年下の弟が先に逝ったことに戸惑い，孤絶感に襲われました。

京植は私たちが囚われて以来，兄の釈放のために身を投げうち，出獄後に糸の切れた凧のようにフワフワと飛び回る私を一面腹立たしく，疎ましく思いながらも，生活を支え，助言を惜しまず，他方では全てのものに絶望し疑いながらも，自らの存在を意味付けようとしてきました。

京植は末弟でしたが，「聞く耳」を持つ慎重な知恵者として，ややもすればぶつかり合う兄弟の中での「取り持ち役」「まとめ役」として掛け替えのない存在でした。いつか私に『家族の群像をリアルに小説にしたい』と，皮肉な笑いを浮かべて言ったことがあります。平素，ピカレスク小説や山口瞳などを好んだ京植が，膨大な情報を蓄積して肺腑を抉る言葉で小説『家族史』を描いていたならと残念です。

京植は京都工芸繊維大学（旧京都高等蚕糸専門学校：通称，コウサン）の裏門，木辻の三軒長屋で生まれました。一階の奥でオモニが木の盥で京植に行水を使わせていた様子が今も髣髴とします。オモニは丸々としてパッチリと目の大きな末っ子をとても可愛がっていました。

我が家は 1956 年ごろ，市内の円町の近くの平町に移り，借家暮らしから工場・倉庫がついた 120 坪ほどの大きな家に引越して，京植は洛陽幼稚園から朱雀第 4 小学校に進みました。京植は兄弟の中ではいちばん大人しくて温和な性格の子供でした。朝鮮人はよく『食べただけが儲けや』と，大いに飲み食いしたものです。我が家の食卓も食道楽のアボジ（父親）とオモニの創意工夫で豪勢なものでした。焼き肉，すき焼き，鯉の刺身，ホルモン焼き，散らしずしや鯖寿司などは定番料理で，つつましやかな日本の家庭の食卓と比べると破格のメニューでした。子どもの好きなコロッケや串カツなどが出ると，食い意地が張っていた次男坊の私の目から見ると京植はいつも控えめで，『兄ちゃん食べえな』と自分の分をそっと差し

出したりしました。

アボジは高等小学校卒，オモニは無学。私の家は朝鮮ではどこにでも転がっている怪しげな両班の族譜（チョクボ）すらない忠清南道（チュンチョンナムド）出身の田舎者でしたが，オモニは人々に対する気遣いの中にもプライドは高く，いつも『世間さま（日本社会）に後ろ指をさされるようなことをしたらあかんで』と言い，両親の口癖は『日本人には負けんように』でした。朝鮮人は学歴志向で，試験でいい点数を取れば褒められたものでした。小学校での京植は，腕っぷしの強かった俊植（ジュンシク）や，現実離れした夢想家の私と比べて，品行方正でよくできる子でした。当時，5人しか枠のなかった京都教育大学付属中学の編入試験を受けたのは，学歴偏重が激しかった私の勧めによるものでした。「ええとこのぼんぼんやお嬢ちゃん」が通う付属は，家からは少し遠かったのですが，文芸部やバスケット同好会で自由な雰囲気を楽しんでいたようでした。

大学進学にどれほど身を入れていたのか知りませんが，高校3年になり，工場の屋根裏にしつらえた京植の勉強部屋を覗くと，ステッキを手にシルクハットと燕尾服姿の今陽子の大きなポスターが貼ってあり，ピンキーとキラーズの「恋の季節」が流れたりしていました。京植は学友と文学談義をたたかわせたり，詩を書いたりして，シャイなチョッと早熟（ませ）た高校生でした。ちょうど東大闘争の年に当たり，東大の入試はなくなり，受験生が押し寄せた京都大学には落ちて，早稲田の仏文に行くことになりました。

大学に入ってからは韓国学生同盟の活動などをしていたみたいでしたが，71年に俊植と私が逮捕され，フランス文学どころか彼の大学生活と人生は滅茶滅茶になってしまいました。もともと繊細で体が弱く，甲状腺ホルモンの異常などがあったようですが，先の見えない釈放運動に絡め取られて，精神的・身体的健康は悪化し，生命の危機にも直面したようです。思春期を経てこの頃から，全身からメランコリックな淀んだ空気をかもし出すようになったのです。70年代後半から，当てのない兄たちの釈放の手がかりを求めて欧米を放浪するようになり，美術館巡りにわずかな救いを求めていたようです。「トリプル・チェックマン」と言われたくらい万事慎重で疑ぐり深く，孤独と憂愁に包まれた京植とロスアンジェルスで出会った在日朝鮮人のB子は『京植は20代とは信じられないほど老け込んで灰色だった』と回想しています。その深い霧の中から，根扱ぎにされた流浪者が懸命に岩にしがみつくようなディアスポラへの接近を強めたものと思われます。

私たちの家は在日朝鮮人としての民族意識は比較的明確でした。京植が直面したのは，韓国の最強の暴力装置である情報機関を相手に，二人の兄の名誉ある釈放をいかに勝ち取るのかという至難の闘いでした。そこで幸運だったのは，アメリカのベトナム敗戦の中で韓国の軍事独裁政権が破綻し，「単一民族神話」を脱して，没歴史的国際化・新自由主義へ向かう前のインターナショナリズムの理想がかろうじて存在し，反戦・平和で，自己批判的で，最も理性的であった時代の日本と日本社会があったことでした。そこで，金大中（キムデジュン），金芝河（キムジハ）の釈

放運動に迫るほどの広大な国際的釈放運動を組織したのは京植の才覚であったのですが，釈放にあずかって最も大きな要因は，日本を含めた海外での韓国の軍事独裁政権批判と，それに呼応した韓国の民主化運動であったと言えるでしょう。

俊植は保安監護を含めた最も残忍な獄中生活を避けることなく，拷問に耐えて正面から抵抗し，凄まじい闘争力を発揮しました。京植も命をすり減らしながら苦悩し抵抗したことは，その後の彼の生活からまざまざと読み取れるのですが，私は押し寄せる試練の過酷さにたじろぎ，驚愕して，拷問を耐え抜く勇気もなく，すべての矛盾を自らの消滅によって解消する方途に頭を巡らせました。そのまま尋問官の手に委ねられていたなら，さらなる拷問に翻弄され身も魂も売り渡す卑劣な行為に出ていたことは想像に難くないのです。そこに保安司令部の西氷庫（ソビンゴ）分室のカマボコ兵舎において監視兵が喫煙のために席を外すという又とない幸運がやってきて，私は『これで全てが終わるんだ』という妙な安堵感の中で自殺を企図したのです。

始末が悪かったのは，その結果，体にまつわり燃え上がる炎の中で受けたショックが私の思考をバラバラにしただけでなく，獄中で先輩たちの後にくっついて，政治犯としての尊厳を守り，処遇改善を要求する闘争や，思想転向に抗する程度の判断はついたものの，獄中や，また出所後にも大火傷という免罪符にもたれて，京植や俊植のような身を投げ打った闘いを避け，安易な生活に堕すことを自らに許したことでした。長い間，京植の諫言から目を背け，彼の内面の苦悩を斟酌しようとしなかった私に，2000 年代の京植の苛立ちと怒りがあったのです。

その間，在日朝鮮人のアイデンティティをめぐって様々な論議がありましたが，朝鮮人の近代的民族意識は日帝の民族抹殺政策が形成したもので，植民地支配体制に身も魂も売った親日派を除いて，朝鮮人は大なり小なり抗日民族意識を持っていました。私たち兄弟の間で歴史とアイデンティティについて，改まった話はなくとも，暗黙の了解があると安易に考えていた節があり，正面から確認することはなかったのです。我々が釈放されて，京植が自分の分野と仕事を持つようになって，兄弟の間の考え方の齟齬は顕在化していったように思えます。

解放後，「在日」朝鮮人社会が形成され，1970 年代には，社会主義思想や階級論の衰退，アメリカの世界市場支配の中での国際化，「ポストモダニズム」の流行の中で「アイデンティティ・ポリティクス」が立ち現れ，「在日論」が高唱され，マイノリティ論が語られるようになりました。「祖国志向」対「在日志向」という二項対立の中で「祖国志向」は旧世代の遺物視されるようになりましたが，私は朝鮮人を日帝によって，故郷や祖国，言葉や文化，名前までも奪われた者と規定し，「奪われた民族」を取り戻すことが，とりもなおさず主体性の確立であり，朝鮮の自主・独立であり，南北統一であり，在日朝鮮人の生きる道であると考えました。俊植は命がけで，「全ての面で本国生まれの朝鮮人以上の朝鮮人になりきる」

決心をし，社会主義思想と民族性の確立を目指して，血のにじむ努力でその課題をやりぬいたと言えるでしょう。解放後にアメリカ支配の反共・分断体制の中で蘇生した韓国の親日・親米派中心の独裁体制に抗して，民族統一と自主独立を志向する「祖国志向」の在日朝鮮人は，日本への同化を拒否し，より完璧な「民族性」を身に着けようと懸命になりました。

アメリカ社会の多民族共生社会論のコピーである「多文化共生社会論」,「在日論」が流行するようになったのは，帰国運動が一段落して，日本の経済的繁栄と国際化の要求が高まる中で，在日朝鮮人の一部が自らを日本のマイノリティとして位置づけるようになってからです。それは，ある意味で自然であったともいえるでしょうが，いち早く日本での永住権を放棄し徹底して祖国の土と化すことを覚悟した俊植や，日本に軸足を置きながらも，日本帝国主義と植民地主義の克服を通じた東アジア民族解放こそが平和・統一の道であると考えた私のような場合と，在日朝鮮人のアイデンティティを重視しながらも，釈放運動を通じて出会った日本や欧米の多くの友人や海外の朝鮮人と協力・連帯し，共に悩み・考えることになった京植の場合とは違いがあったと言えるでしょう。京植はそれらの人々とともに「苦痛の連帯」を築こうとする中で，美術や音楽という普遍的価値に接近して共鳴することになったと考えられます。

京植の遺稿となった『私のアメリカ人文紀行』（韓国語，2024 年 1 月，반비）には次のような件があります。

> 1980 年代後半，民主化が進んで，私の二人の兄を含む政治犯が釈放された。あちこちで感激の抱擁があった。その瞬間を忘れられないが，その感激の裏には，間もなく失意や幻滅の影が忍び寄っていた。長生きすると，苦々しい現実も見えてくるのだ。……「兄弟」が再会の喜びの抱擁なら，こちら（「愛に満ちた夜の回想」）は，別れを予感させる。人は人をこのように抱きしめることのできる存在である。あの二人の分かち合った温かさが，私の内にまでしみ込んでくるようだ。本当にベン・シャーンならではの表現だ。（p. 184）

この件を読んで，釈放後に兄弟の温かさを求めながら，失意と幻滅に打ちひしがれ死んでしまった京植を思い，自らの過ちや至らなさを思い知らされたのでした。しかも，この失意と幻滅は単なる「兄弟愛」だけではなく，南北に分断されながらますます自己疎外を深めている民族の現状や，巨大な資本や国家の論理によって人間が摩耗していっている世界の現状に起因するところもあるのです。私たちの釈放後にも，より人間的な社会の実現を求めて，人間の解放を求めて果たせなかった京植は，失意や幻滅に沈淪していったように思えます。

京植の「ディアスポラ論」は時宜を得て，特に韓国で膾炙されましたが，俊植は強く批判していたようです。私も違和感を感じてきました。ディアスポラは「故郷」から引き剝がさ

れて離散した存在であり，国家や制度社会から弾き出されて，その保護を取り払われた存在として観念されています。だから国境に依拠して，「国益」の名のもとに利己的利益を追求する現代国家の属性から，その保護を取り払われたディアスポラが再生産され，増殖しているわけで，結局，国家や国境の消滅に至らずにはディアスポラの痛みは解消されないといえるでしょう。しかし，ディアスポラは現象的な分析概念であり，その向こうを展望する「社会科学的」説得力を持たないように思われます。それにディアスポラ概念は植民地支配下での流浪民や海外に在住するコリアンには該当するとしても，曲りなりにも「祖国」を持つようになった解放後の民に当てはまる概念とは考えにくいのです。にも拘わらず，韓国で膾炙される理由は「ポストモダニズム」の流行の中で，マジョリティの中のマイノリティの問題や，移住労働者，多文化家庭の問題など，韓国における既成のアイデンティティですくい取れない者たちに適用しうるからだと思われます。

しかし，今回の韓国の総選挙で明らかなように民族や民衆の運命を決する天王山は，先ず何よりも帝国主義と親日親米の独裁政権に抗する，民主化・民族自主・統一運動にあり，言い換えるなら権力奪取の問題にあると思われます。ただし，よしんばそこで勝利をしたとしても，その後に坦々とした緑の草原が現れるとは限らず，つかの間の幸福感の後に先の見えない失望と挫折が待ち構えている可能性が高いのです。しかし，そのシジフスのような苦行を続ける他には前に進む道は見いだせないのではないでしょうか。

私たち兄弟は，年老い病んで間もなくこの世と離別せざるをえないでしょう。それで京植にまた会えることができれば，どれほど素晴らしいことでしょうか。今から 6，70 年逆戻りして，幼いころの京植に対する心無い仕打ちを謝ることができれば，少しは心休まるのに……。少なくとも俊植や京植の奮闘に少しでも報いてくれるような歴史の前進を感じられるなら，どれほど心癒されるでしょうか？

しかし，今は，無数の愛着と絶望，矛盾を抱えて去って逝った京植に対して，アイゴーの叫びで答えるしかありません。

徐京植さんの思い出

宋 連 玉

登壇者の中で，お兄さんの徐勝さんを除いて，徐京植さんについてもっとも旧くから知る者として思い出を語らせていただきます。

1970 年 12 月末，韓国に留学した最初の年に，友人を介して徐勝さんから連絡が来ました。私と徐勝さんが親戚だと言うのです。会ってみてわかったのですが，徐勝さんのお母さん（呉己順さん）の妹さんが私の遠縁の人と結婚していたのでした。日本流にいえば，まった

くの「赤の他人」ですが，徐勝さん独特なノリで，「いとこと会っているような気がする，冬休みに京都の実家に遊びに来たらいいよ」と言ってくださいました。私もそのノリに乗せられ，遊びに行くつもりでいました。

ところがその3か月後に，徐勝さんと弟の俊植さんが在日韓国人政治犯として逮捕され，私たちが歴史を学んでいた李成茂先生も関係者として逮捕されましたので，私自身大きな衝撃を受けました。以後，韓国の政治的厳しさに背を向けるわけにもいかず，勉学は続けましたが，留学生活は緊張の連続でした。しかし1975年11月にさらに大掛かりな留学生スパイ事件がでっち上げられ，私はやむなく学業を中断して日本に戻るしかありませんでした。

翌年，1976年春から京都大学人文科学研究所で開かれた朝鮮近代史研究会に参加するようになりますが，そこで京植さんに初めてお会いしました。ソウルでの徐勝さんとのやりとりを伝えると，京植さんはご自宅に招待してくださいました。研究会仲間の水野直樹さんも一緒でしたが，お母さんの呉己順さんは快く迎えてくださり，夕食もご馳走してくださいました。その食卓はまぎれもない在日朝鮮人家庭の歴史も，文化も詰まったものでした。そんな食事に育まれてきた京植さんに親近感と信頼感を感じたのも事実です。

呉己順さんは利害と義を秤にかけない，独自の倫理観の持ち主でした。この場合の義とは正義も義理も含む広い意味ですが，理不尽なことを許さない正義感の強い方でした。

また教科書のいわゆる「国語」にはない日本語の表現も豊かでしたが，あいまに交えるユーモアも独特でした。息子たちの面会に行く道中で，見知らぬ乗客からセクハラ発言を浴びせられたときの，巧みに切り返したエピソードなどさらりとお話しされる話術に，私はすっかり魅せられ，その後何度も訪問し，お相伴に与り，挙句の果てに泊めてもらったことまでありました。水野さんと三人で川の字になって寝たことも，はるか昔の楽しい思い出です。

呉己順さんがご病気になられたことを聞き，お見舞いに行きましたが，そのときも明るく気丈に振る舞っておられました。

韓国の軍事独裁政権の国家暴力と対峙する状況にあって，呉己順さんと徐京植さんは小さなシェルターで支えあっておられたと思います。徐京植さんの書かれた「母を辱めるな」（初出1998年，のち徐京植『半難民の位置から』影書房，2002年，同『日本リベラル派の頽落』高文研，2017年所収），呉己順さんと同世代の日本軍「慰安婦」にも思いを致した文章に対し，日本女性からも在日朝鮮女性からも徐京植さんのジェンダー意識について批判する声が聞かれました。しかし私はむしろその性急な批判に違和感を覚えました。徐京植さんにとって呉己順さんは母であると同時に国家暴力に抗する同志であり，国家権力に利用される母性ではないのです。呉己順さんは息子たちの救援活動を通じて家事の達人から人権活動家に変わっておられたことを見逃してはいけません。

徐京植さんの肺腑をえぐるような文章力はお母さん譲りだと見ていますが，その人柄は母の賢さと父の朝鮮の農民的善良さ，人情味を兼ね備えておられたと思います。鋭く批評する

ときには容赦ありませんが，合間に見せるお父さん譲りの気の良さが魅力でもありました。

ただ，私は徐京植さんに生活人としての階級意識の隔たりを感じていましたので，一度「呉己順さんの食卓を忘れないでほしい」と苦言を呈したことがありますが，そんなときにでも謙虚に耳を傾けておられました。徐京植さんは 2000 年 12 月に東京九段会館で開催された女性国際戦犯法廷に参加していた数少ない在日朝鮮人男性でしたが，性差別が植民地主義と交差すると認識していたからの行動だったのでしょう。

感受性の強い思春期にいわゆる名門中学・高校に通ったことで，恵まれた中産階級の同級生とのもろもろの格差を目の当たりにし，在日朝鮮人であることの自意識を 24 時間，365 日，6 年間もの長い時間，研ぎ澄まされ，苦悩したのだろうと想像しますが，この独特な経験をベースに発酵させたのが半難民という概念だと思います。

女性だけの井戸端会議で徐さんへの批評をおもしろおかしくしたことはありますが，在日朝鮮人の実存から出発し，構築した思想への確固たる信頼感は私の中で伏流していました。李良枝の『由熙』に対する書評（「ソウルで『由熙』を読む」，初出 2007 年，のち徐京植『植民地主義の暴力』高文研，2010 年所収）も他の書評よりも共感できるものでしたので，世間が絶賛する小説『パチンコ』を徐京植さんがどう読まれたのか，その感想を聞けなかったのが残念です。

徐さんとは韓国に 2 年間在外研究に行かれた頃から疎遠になりましたが，昨年 10 月に数年ぶりにメールのやり取りをしました。そこには後進の導きをよろしくお願いしたいと書き添えておられました。

1980 年代，ご両親を続けて亡くされた後に，ヨーロッパ旅行に発たれましたが，その旅先から 2 回絵はがきを送っていただきました。韓国より遠くへ行ったことがなかった私はいまでもその 2 葉を大切に保管しています。

徐京植さんが亡くなられた日は偶然にも私の誕生日です。この年齢になるとむしろ誕生日は忘れたい，また実際に忘れて過ごすことも多いですが，今後は絵はがきに託された友情と，徐京植さんの「遺された課題」を私なりに応えられたかどうかを内省する節目にしていきたいと思っています。

植民地主義という岩盤に生卵を投げつづけるような孤独な闘いの日々。お疲れ様でした。その課題は後進たちが引き継いでいくものと信じます。

そして末尾になりましたが，長年の友情にも心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

合掌

徐京植さんを偲ぶ

鵜飼　哲

徐京植さんは突然私たちを残して遠くへ行ってしまわれました。訃報を受けて茅野のご自宅にうかがい，お顔を拝見しました。あれから4ヶ月が過ぎましたが，私には京植さんがおられるその〈遠く〉が，思いがけないほど，とても〈近く〉に感じられてなりません。徐京植さんの言葉，声，存在が，深く心中に刻まれているからでしょうか。こちらから声をかけられるような隔たりには，おられないような気がしています。

いつからそのような〈近く〉に徐京植さんの存在を感じるようになったのか，私の場合，思い返すと『二十世紀の千人』というシリーズ（朝日新聞社編，全10巻，1995年）の執筆を一緒に担当していた1990年代に遡るように思います。終わろうとしている世紀に，かけがえのない足跡を残した人々の4頁のミニ評伝を，一冊100人収めた単行本を，月刊で10冊出版するという，世紀末でなければ考えられない朝日新聞社のこの「無謀」な企画のために，京植さんと私は，毎月何本も原稿を書き継がなければなりませんでした。10ヶ月のあいだ，私たちは同じようなタイムスケジュールで締め切りに追われていましたので，私のなかではいつのまにか自他の区別が曖昧になり，京植さんと同じ条件，同じリズムで仕事をしていることに，疲労の底で，なにか晴れがましいような，ほとんどトランス状態に近い高揚感を覚えるようになっていました。

京植さんはこのときのお仕事を，『過ぎ去らない人々――難民の世紀の墓碑銘』（影書房，2001年）というご著書にまとめられました。49本の評伝が収められていますが，アメリカのイタリア系アナキストで冤罪のため死刑に処せられた「サッコとヴァンゼッティ」，第二次大戦下のドイツで，「白バラ」と名乗る反ナチス抵抗運動に身を挺してやはり死刑に処せられた「ショル兄妹」が含まれていますので，合わせて51人の墓碑銘が，この本には刻まれていることになります。それにしても，一月あたり平均ほぼ5本のペースだったことになります。そしてその一本一本が実に素晴らしい肖像画なのです。言葉による画家の仕事と言ってもいいようなデッサンの見事さに，私は毎月感嘆を新たにしていました。

この51人は，非常に多様な民族，出自の人々です。しかし私には，当然のことながら，京植さんが朝鮮人と日本人のなかから誰を選ばれたのかが大変気になりました。『過ぎ去らない人々』に朝鮮人は安重根からお母様の呉己順さんまで，15人が選ばれています。日本人はスペイン内戦で戦死したジャック白井から江分利満まで11人。「江分利満」は作家・山口瞳の作品の，作者の分身であるような登場人物ですが，京植さんは作家の名ではなく，英語では「すべての人」を意味する登場人物の名を，「二十世紀の千人」の一人としてタイトルにされたのでした。またジャック白井は函館の生まれですが孤児院で育った人で，米国に

密入国してコックとして働き，ほぼ密航に等しい状況でスペイン共和国支援の国際旅団に参加，マドリード攻防戦で戦死しました。出自そのものに難民性がまつわるこの人には，朝鮮人ではないかという噂がありました。京植さんは彼が日本人でなかった可能性に言及されています。

徐京植さんがいつまでも変わらないこの日本という国とどのように向き合われてきたか。この 11 人ないし 10 人の選択から，私は沢山のことを考えさせられました。すでに名著『私の西洋美術巡礼』（みすず書房，1991 年）の著者であり，後年何冊もの不朽の美術評論を上梓された徐京植さんは，意外にもこの 51 人のうちに，西洋の画家としてはスーティンとカンディンスキーしか取り上げられていません。それに対し，日本人のうち 3 人が画家なのです。朝鮮人のなかには一人も画家がいないことと顕著な対照を示しているように思えます。その 3 人は佐伯祐三，靉光，そして鴨居玲です。非業の最期を遂げたこの画家たちの評伝のなかで，私はとりわけ鴨居玲論に強く打たれました。他の二人の画家とともに，日本の絵画伝統のなかでは稀な自画像画家であり，3 人のうちでは唯一戦後の画家だった鴨居玲は，幾度も自殺を試みた末，1985 年，最終的にみずから命を絶ちました。単行本では「最後の自画像画家」と題された文章の末尾から，徐京植さんの言葉を引用させていただきます。

> 鴨居玲がゴヤに傾倒していたことは有名である。プラド美術館の『黒い絵』の部屋で，幾日も呆然として過ごしたという。そのことを思うと，ゴヤに始まった「近代」という課題を，今日にいたるまで人類がいささかも解決していないことにあらためて暗然とさせられる。それと同時に，七十八歳で亡命するまで宮廷画家にとどまり戦争と内乱あるいは異端審問など数々の試練をくぐり抜けながら，闇の奥底にひそむものを掴み出すようにして傑作を残したゴヤに比べれば，鴨居玲の自死にはまだ甘ったるいものがまとわりついている。その甘さは鴨居玲の魅力の本質的な一部分ではあるが，彼が困難な一線をのり越えないまま自死のナルシシズムに自己完結したのだとすれば，やはり「日本的」な結末のつけ方と呼ぶほかない。鴨居玲を「日本でただ一人と呼んでもよい本質的な制作者」とする坂崎乙郎にほとんど同意しつつも，この点で留保をつけなければならない。

徐京植さんの思想，感性のやさしさときびしさ，その奥行き，深さがひしひしと感じられ，痺れるような感動を覚えたことを覚えています。21 世紀の世界のどこを見ても，「ゴヤに始まった「近代」という課題」が「いささかも解決しない」まま，私たちは徐京植さんを失ってしまいました。

3 年前，オンラインで参加させていただいた徐京植さんの退職記念のシンポジウムで，私は 30 年ほど前のある集会で，徐京植さんが発言された言葉を記憶で引用させていただきま

した（鵜飼「「在日」を考えることと生きること」，早尾貴紀ほか編著『徐京植　回想と対話』高文研，2022年）。それに対して京植さんは，「自分が昔言ったことを覚えている人がいるというのは困ったことですね」と，パソコンの画面のなかから，笑顔で応えてくださいました。それが私たちが交わした最後の言葉になってしまうとは，そのときは思いもかけませんでした。このとき私は心のなかで，「でも京植さん，あなたのように忘れられない言葉を発する人はめったにいないのですが」と呟いていました。

というのも，徐京植さんの言葉からは，私的な会話のなかでも，二度と忘れられない印象を受けることがたびたびあったからです。お付き合いの深かった方々にはそれぞれ，パーソナルな，いわば私家版・徐京植語録とでも呼べるような言葉の思い出がおありなのではないでしょうか。京植さんはある日，こんなことを言われました。「鵜飼さん，眠るのにも体力がいるんですよ。」年齢の差は4歳ほどでしたが，年長者の立場からの，加齢とはどんなものかについての，予告的，警告的アドバイスでした。この言葉を，眠れない夜，私はいつも思い出します。ああ，自分にも京植さんが言われていたあの時がついに来たかというような感慨とともに，京植さんの面影が蘇ります。これは一例にすぎませんが，折に触れて蘇るこのような言葉が記憶のなかにいくつも，いくつも潜んでいることに驚かされます。

私は3年前に移住して，現在は長野県松本市に住んでいます。車で一時間ほどの霧ヶ峰高原に，京植さんがなにもかも忘れてひとときのくつろぎを見つけることのできる場所があったことを最近知りました。安曇野の碌山美術館，豊科近代美術館など，徐京植さんが大変好まれた，小さな，美しい美術館も遠くありません。私も退職後は少し美術を勉強し直し，いずれ京植さんから学んだことを言葉にすることを試みながら，京植さんと対話をしてみたいという夢を抱いていました。

自宅のすぐ側の喫茶店の本棚に，お兄様の徐俊植さんの獄中書簡集を見つけたときには本当に驚きました。ここでもいつか，京植さんとひとときを過ごすことがあるかも知れないなどと，勝手な想像を巡らしたりもしていました。

松本にも徐京植さんの熱心な読者の方々がいて，いずれゆっくりお話しをうかがう機会を設けたいと話していた矢先の悲報でした。あまりにも悲しく，無念でなりません。これからも心の奥深くに徐京植さんのまなざしを感じながら，残された時間，対話を続けていきたいと思います。

京植さん，お疲れさまでした。有り難うございました。これからも，どうぞよろしくお願いいたします。

徐京植さんを偲んで

高橋哲哉

ご紹介いただきました，高橋でございます。

徐京植さんが急に逝ってしまって，早くも半年がたちました。私も皆さんと同じように，とうてい埋めがたい喪失感を，今も持て余しております。今日は，徐さんとの思い出，とくに最近の思い出を振り返ることで，追悼の言葉に代えさせていただければと思います。

私が徐京植さんと知り合ったのは，1995 年，ほぼ 30 年前です。ただ今お話しくださった鵜飼さんの御紹介によってでした。それから急速に親しくなりまして，一緒に沢山の仕事をさせていただきました。ご承知の通り，徐さんのお仕事は非常に広い分野にわたっておりますが，幸いその一部が，私の狭い守備範囲と重なっておりましたために，対話の相手に加えていただけたのだなと，そう思っております。

徐さんとした仕事は全て私にとって大事なものですが，とくに個人的に大切に思っておりますのは，2 冊の対談本です。ひとつは初期の頃，2000 年に上梓しました『断絶の世紀　証言の時代――戦争の記憶をめぐる対話』（岩波書店）。それと，2018 年の（これは，この後登壇される高文研の真鍋さんが作ってくださった本ですが）『責任について――日本を問う 20 年の対話』（高文研）。この 2 冊です。

振り返ってみますと，私のこれまでのささやかな仕事の，全てではないとしても，かなりの部分は，この対談本のように，徐さんからの問いかけに対する私なりの応答，徐さんに課せられた宿題に対する未熟な回答のようなものだったと，そんな気がしております。

『責任について』を上梓してから，この 4，5 年の間，直接お会いしてじっくり話し込むという機会をもてないできました。コロナ禍のせいです。ようやくコロナ禍も明けたので，そろそろまた信州・茅野のお宅にお邪魔してゆっくり話したいですね，と言っていた矢先，何と言うことでしょうか，その機会は，突然，将来にわたって，奪われてしまいました。

ただ，その代わりというのは変ですが，徐さん御逝去の 3 日前，12 月 15 日の夜に，場所は茅野のお宅ではなく新宿の高麗博物館でしたが，対面でお会いして，議論を交わす最後の機会が与えられたことは，本当に，不思議な巡り合わせを感じないではいられません。

徐さんから久しぶりのメールが入ったのは，その一月ほど前，11 月 16 日でした。ご紹介させてください。「高橋さん，ご無沙汰しました。お変わりありませんか？　ガザの惨状に言葉がありません。相変わらずの体調で体は動きませんが，心は焦慮の毎日です。世界史のこのような局面（全般的没落と破綻）を直接経験することになるとは…。いつかご都合と体調，時間が許せば，いろいろお話を聞かせてもらいたいと思っています。どうかどうかお元気でお過ごしください。徐。」

私はこのメール，いつもの調子と違うなと，たしかに，尋常でない「焦慮」の念を感じました。夜遅かったので，一晩置きまして翌朝，さっそくお電話してお話ししました。そこで徐さんから，12 月に高麗博物館の館長に就任するので，最初の学習会で話をしてほしいと頼まれまして，お引き受けしたわけです。

12 月 15 日の夜，徐さんは脚が弱っておられましたので，舩橋さんがしっかり付き添っておられました。これからお話をされる鎌倉さん，早尾さん，真鍋さんも，参加してくださいました。そこで徐さんは，私の隣に座って，司会進行と最初のコメンテーターを務めてくださったのですが，終了後，時間が遅かったために，そのまま茅野に戻られて，3 日後に，帰らぬ人になってしまったのです。皆さんの資料（「偲ぶ会」当日配付資料）の最後に掲載されている絶筆（『私のアメリカ人文紀行』「あとがき」）は，この間 12 月 17 日に脱稿された，というわけですね。

今日この場では，徐さんが生前，私たちに贈ってくださった，贈り物としてくださった，沢山の言葉が紹介されるものと思います。ラストインタビューの上映もあります。それらの言葉の中に，徐さんが私にくださった最後の問いかけ，最後の宿題となった言葉を加えていただきたいと思いまして，以下，ご紹介させていただきます。高麗博物館の学習会のために，徐さんから送られてきた宿題です。11 月 27 日のメールです。最初と最後のあたりを省略して，読ませていただきます。

> ガザでは現在，一時的な「戦闘中止」状態ですが，このまま収まるとは思えません。ウクライナについては日本での報道がめっきりと減りましたが，誰にも先行きは見えていません（むしろプーチン政権の延命可能性が強まっているようです）。オランダの総選挙やアルゼンチンの大統領選挙で，排外主義を唱える極右派が勝利しました。アメリカやおそらく中国も影響力の低下は覆いがたいところです。
>
> 世界はこれからどこへ向かっていくのでしょう？　その中で日本の，そして朝鮮半島の占める位置と役割はどうでしょうか？　そして，沖縄は？
>
> これらの問い（もちろん問いはもっと多様であり，複雑ですが）にすべて答えることは当然無理でしょう。それでも思考停止に陥らず，考え続けなければなりません。そのためには，一つ一つの問いに振り回され，一喜一憂するのではなく，100 年単位の長く広い視野が求められると思います。いわば，「思想的構え」のようなものですね。
>
> 私個人としては，「ファシズム」と「ホロコースト」の経験が曲がりなりにも 20 世紀後半以降の世界の核心的思想的参照点であり，基本的「尺度」（世界人権宣言，ジェノサイド禁止条約など）であったとすれば，現在はその「尺度」が大きく揺らいでいると思っています。いま「ホロコースト」と言っても，その語りは類型化され，誰も改めて心を動かされたりはしないのではないでしょうか。20 世紀の経験から（ユダヤ系の）

知識人たちの思索に大きく示唆されてきた者の一人として，いま改めて，きわめて困難な思想的難関に逢着していると感じるのです。［中略］

聴衆の大半は高麗博物館のボランティアであり，まさに善意の市民たちです。そこに，最近加わってくれた若い人たちも参加します。簡単には結論の見出しがたい難問を考え続けることも，この種の活動には必要です。高橋さんには大変厄介なお願いで恐縮ですが，どうぞよろしくお願いします。

さて，いま徐京植さんは，この「簡単には結論の見出しがたい難問」から，解放されたのでしょうか。それとも，今なおどこかで，この難問を抱えて，私たちにも問いかけているのでしょうか。「世界はこれからどこへ向かっていくのでしょう？　その中で日本の，そして朝鮮半島の占める位置と役割はどうでしょうか？　そして，沖縄は？」。「100 年単位の長く広い視野」，「いわば，「思想的構え」のようなもの」が求められる，ということです。この問いは，明らかに，私一人に向けられたものではありません。私たちで共有し，それぞれの場所から，徐さんに応答しなければならない，そういう問いではないかと思い，ご紹介させていただきました。

徐京植さんの御冥福をお祈りいたします。ありがとうございました。

「徐京植」という羅針盤

真鍋かおる

私が徐京植さんと出会ったのは，たしか 1995 年頃だったと思います。当時，私は『週刊金曜日』の創刊スタッフとして働いていました。編集部専属のライターがいるわけではないので，とにかく誌面を埋めるために原稿を書いてくれる人を探す毎日でした。

そんなときに徐さんの『子どもの涙――ある在日朝鮮人の読書遍歴』（柏書房，1995 年，文庫版：小学館文庫，1998 年，復刻版：高文研，2019 年）を読んだのですが，すごい書き手に出会ってしまった，これはもう原稿をお願いするしかないと，手紙を書いて池袋か市ヶ谷の喫茶店で出会ったのが最初でした。

とにかくメチャメチャ怖かったというのが第一印象でした。「お前はどういう人間なんだ？」と身体の奥底まで見抜かれる感じでした。いまから思うと，当時はお兄さんたちが解放されてからそれほど時間が経っていませんでしたので，それまでの過酷なたたかいの緊張感を身にまとっていたのではないかと想像しています。

その頃のやり取りで最もよく覚えていることをお話しします。

1995 年というのは，敗戦後 50 年，91 年には元「慰安婦」の金学順さんが名乗り出て，93

年には河野談話，95年には村山談話と，自民党長期政権が崩れて，ようやく大日本帝国の侵略戦争と植民地支配の歴史に向き合い，近隣諸国に対してその責任を果たす兆しが見えてきたかと思われた頃です。その反動で，「新しい歴史教科書をつくる会」をはじめとする右派の政財界・メディアを巻き込んだバックラッシュが大きな流れとなっていました。

私は『週刊金曜日』でもその一連の動きに対する批判の論陣を張ろうと思い，徐さんにもことあるごとに「思いつき企画」をぶつけていました。そんなときに，徐さんにズバッと言われたのが，正確な文言は思い出せませんが，「在日朝鮮人の言説を消費するな」の一言でした。まだ，30歳そこそこでとにかく目の前の週刊誌を作ることだけを考えていた私には突き刺さる言葉でした。当たり前のことですが，大日本帝国の侵略戦争と植民地支配についてきちんと向き合わなければならないのは日本人です。言葉は悪いですが，「他人のふんどしで相撲を取る」編集者としては手足を縛られたと感じました。しかし，この徐さんの言葉は今でも仕事をする際に頭の片隅にあります。

その後，『週刊金曜日』から高文研に移ったので，徐さんとはしばらく仕事上のつきあいはなくなりました。

初めて，原稿を預けてもらったのが2010年発行の『植民地主義の暴力――「ことばの檻」から』（高文研）でした。徐さんから声をかけてもらって，本当にうれしかったです。編集者にとって著者から原稿を預けられることは，信頼してもらえたということですから夢中になって仕事をしました。以来，単著・共編著合わせて7冊担当させてもらいました。

徐さんの本をどうやって多くの読者に手に取ってもらうか，それが編集者の仕事ですが，正直非常に売るのが難しい本でした。徐さんの文章や語る言葉は，接した方にはわかっていただけると思いますが，一つひとつの文章が組み合わさり，重層的で，そしてその射程が長いのです。その上，哲学・歴史・文学・美術・音楽など，徐さんのフィールドはとてつもなく広く，「四六判，天地188 mm・左右130 mm」の器にどう収めたら良いのか，いつも悩みました。

徐さんが自身の著作や言論活動について半ば自虐的に語っていた言葉が「知のゲットー化」です。日本の大きな書店に行くと，哲学・歴史・文学・美術・音楽といったジャンルがきちんと分類され，フロアも異なります。この書店という空間に徐さんの表現は収まりきらないのです。

具体的な編集作業についても同じことが言えます。私の場合，最初に原稿を読むとき，校正作業を行うとき，「これは良い言葉だ」「この言葉は帯に使える」というように，目にとまった言葉を書き出すようにしています。そのように抜き出した言葉を並べて眺めていると，タイトル・帯・目次，本の全体像が見えてきます。取次や書店向けに新刊の書誌データやチラシを作る営業担当者に，「この本はこういう内容で，面白いところはこういう点だ」と本の全体像や特徴を伝えます。つまり，極力短い言葉で一冊の本を表現することを心がけるよ

うにしています。

ところが，徐さんの本はそう簡単ではありませんでした。くり返しになりますが，徐さんの射程の長さ・深さ，視野の広さが私の力ではしっかりとつかみきれないのです。変な言い方かも知れませんが，「手が付けられない原稿」と言ったらいいでしょうか。私が担当した徐さんの本は，主に植民地主義批判の本と言っていいのですが，ある程度テーマや方向性が見えていても「手っ取り早くまとめる」ことを拒否するような文章でした。これがさらに美術や音楽となると，私のような守備範囲の狭い編集者は「お手上げ」の状態になります。

編集者は著者の素晴らしさ，言いたいこと，読者に共感してもらいたいことを四六判の本に詰め込もうとする，ある意味では傲慢な，暴力的な仕事をせざるを得ないのですが，徐さんの原稿を読んでいると，一つひとつの文章のつながり，積み重ねが寸分のずれもなく組み合わさっていて，そこに手を突っ込んで抜き出そうとしたり，組み替えようとすることを拒絶するような緊張感がありました。

一つエピソードを申し上げますと，2 冊目の『詩の力――「東アジア」近代史の中で』（高文研，2014 年）のときです。徐さんから「書名は『詩の力』はどうかな」と提案された際，瞬間的に「このタイトルだと，書店の文学の棚，詩歌の棚に入ってしまう。やめた方がいい」と思いました。しかし，校正ゲラを読みながら，タイトルにふさわしい短い言葉を抽出しようとするのですが，先ほど述べたようなことでついに私の力では「このタイトルでいこう」という言葉を見つけられませんでした。著者と一勝負するぞと意気込んで，自分のとっておきのタイトルをぶつけようとして，徐さんのあの顔，あの声，あの目を前にしてガックリと膝をつくというようなことがありました。

そういう意味では，徐さんの原稿はまったく「手のかからない原稿」，言い換えれば「編集者が仕事をさせてもらえない原稿」といってもよいかと思います。ですから，タイトルや帯，見出しのほとんどが徐さんが考えたもので，私が付けたものはありません。

編集者はいろいろな原稿を前に本のイメージを作り上げます。本ができあがるまで，小さな決断を積み重ねていくわけですが，その判断基準，羅針盤のような存在だったのが徐さんでした。最初に出会ったときから「お前はそれでいいのか」と問いかけられてきたような気がします。徐さんが亡くなっても，私の中には徐さんの問いかけが生きています。これからも徐さんと対話しながら本を作っていこうと思います。

本日はありがとうございました。

徐さんと食べ物の思い出

澁谷知美

徐京植さんとの思い出をたどると，かならず出てくるのが食べ物です。

まず，教授会のときにこっそりくれた飴やチョコレート。徐さんと私が所属していた現代法学部の教授会では姓の五十音順に座るしきたりがあり，徐さんと私は隣同士でした。重要ではあるが楽しいとはいえない時間がつづき，「疲れたな」と思ったタイミングで「これ，いかがですか」とスっと差し出されるお菓子は，まさに天の恵みでした。

徐さんのお心づかいがうれしくて，自分で買うのより何倍もおいしいのです。どれもおいしかったけれど，韓国出張のあとでいただいたヌルンジ（おこげ）飴の甘じょっぱさは忘れられません。

私たちは全学共通教育センターという部署にも所属していました。その会議では，チョコレートとサブレが合わさったブルボンのお菓子アルフォートをいただきました。「1つ取って，お隣に回してくださいね」という徐さんの伝言とともに，人から人へとアルフォートの箱が回っていくさまは，とてもゆかいでした。というのも，アルフォートには船の絵が刻印されており，そのことが，アルフォート号が会議室の海をぐんぐん航海しているイメージを想起させたからです。

アルフォートだけでなく，高級チョコレートの代名詞ゴディバの大きい箱を回してくださることもありました。個人的にもゴディバの詰め合わせをいただくことが何度かあり，ゴディバといえば徐京植さん，という等式が私の中でできています。こちらは船ではなく，馬に乗った裸の貴婦人がシンボルマークです。このマークの由来を，私は徐さんから聞いてはじめて知りました。

不思議なのは，100円代で買えるアルフォートも数千円するゴディバも，徐さんからいただくと等しくおいしいということです。それはなぜなのか。2つ仮説を考えてみました。

1つは，秘密共有説です。「まじめな会議で人知れずオヤツを食べている我々」という秘密の共有が連帯感を生み，さらにアルフォートやゴディバを等しくおいしいものにしているのではないか。

もう1つは，徐京植お茶目説です。このように表現するしかないので敢えてこのような表現を使いますが，私にとって徐さんは，お茶目でかわいらしいおじさんでした。だって，会議中にオヤツを回してくれるんですよ。こんなお茶目な行為ありますか。厳しい，怖い，というパブリックイメージがあることを後で知り，びっくりしたくらいです。

お茶目でかわいらしい人は，本人の年齢や性別にかかわらず，周囲を幸せにします。徐さんが私たちにもたらす圧倒的な幸福感の前では，2つのチョコレートの価格帯の差異など意

味を失い，楽しかった記憶とおいしかった感覚だけが残ります。これが徐京植お茶目説です。

皆さんは，どちらの仮説を支持しますか。あるいは別の仮説でしょうか。

徐さんが登壇されたシンポジウムのあと，食事会に混ぜていただいたこともありました。中華料理店にて，10 人ほどで大きな回転テーブルを囲み，ワイワイとおしゃべりをしながら八宝菜や紹興酒などをいただきました。会話の中心にはいつも徐さんがいて，初対面の者同士もつないでくれます。徐さんから同心円状にひろがる愛と笑いに満ちた空間そのものが，もう一品の料理でした。

徐さんの評論に刺激され，ベルリンのケーテ・コルヴィッツ美術館に行くことになったさいは，「美術館もいいけどね，お隣のカフェの朝食もまた素敵なんですよ」と教えていただきました。本当に素敵でした。美しいピンク色のハムの上に，太陽のような目玉焼きが 3 つ。かたわらには，濃いだいだい色のメロンとルビー色のジャムを載せた皿，パンやクネッケを満載したバスケットが添えられています。この色あざやかさがモノクロを基調としたコルヴィッツの作品世界と好対照で，旅がいっそう印象ぶかいものになりました。

徐さんが東経大を退職される数年前から，私は不安でした。徐さんのおかげで勇気を得たこと，傷つかずにすんだことが山ほどあります。徐さんはいわば盾のような存在でした。徐さんがいらっしゃらない東経大で，どう生きていったらいいんでしょうか？　そうやってご相談したことがありました。徐さんは笑いながら「今度はあなたがそんな存在になればいいじゃない」とおっしゃいました。いや，無理です……。人間のスケールが違いすぎます……。

そんなふうに私がまごまごしているうちに，徐さんは，突然この世から旅立たれてしまいました。

徐さんとお菓子を分けあう機会はもう二度とおとずれないのかと思うと，泣けて泣けて仕方ありません。この原稿を書いてるあいだも涙が出てきます。徐さんが旅立って 7 カ月が経とうとしているのに。

でも，徐さんのアドバイスにしたがえば，今度は私が隣の人にお菓子を差し上げればよいということ。それぐらいはできるかも。徐さんのようにはなれないけれど，お菓子をきっかけにひろがる会話を大事にすることから，はじめていこうと思います。

そして，できれば，これを読んでいるあなたも。誰かにお菓子をあげて，会話と時間を分かちあってください。そうすることが，徐さんへの恩返しであるような気がしてなりません。

徐さん，これまで本当にお世話になりました。おいしいお菓子を召し上がりながら，空から見守っていてください。

※徐さんが東京経済大学を退職されるさいに「贈る言葉」として書いた同タイトルの文章（東京経済大学教職員組合機関誌『輪』第 221 号，2021 年掲載）を，大幅に加筆修正しま

した。

徐京植という「尺度」

鎌倉英也

今，ご覧いただいたビデオですが，これは放送番組ではありません。なぜ，このビデオを作ったのか，その経緯からお話します。

昨年 12 月 15 日に高麗博物館で徐さんと高橋哲哉さんによるパレスチナ・ガザについての勉強会がありまして，その会で僕は徐さんと「じゃあ，またね」と言って別れました。と，申しますのは，それから 10 日後の 12 月 25 日，クリスマスの夜に，僕たちはある会を開く予定だったんです。それは，NHK の若いディレクターやカメラマンたちが徐さんを囲んで集まる会でした。NHK の中にも現状に問題意識を持っている若い世代が結構おりまして，僕は失望していないんですが，彼らが「徐さんを招いて学ぶ自主勉強会を開きたい」と言い出して企画された会でした。ところが，高麗博物館で別れて 3 日後の 12 月 18 日夜に急逝された。皆とても驚き哀しみ，会を中止せざるを得ないと悔やんだのですが，舩橋さんから「徐さんはその会をとても楽しみにしていたから，ぜひ予定通りやって」と言われまして，その言葉に押されるようにして開きました。追悼会になってしまったその場で，「若い後輩たちに徐さんという人が何を考えてきたか是非見てもらいたい」と思い立って僕が作ったのが，あのビデオです。一晩で作った急拵えのものですので，ナレーションも素人の僕の声で聞きづらかったと思います。すみません。そのような自主制作ビデオなんです。

ビデオの冒頭で紹介したのは，ガザの現状についての徐さんの発言です。これが生前の徐さんのラストインタビューになってしまいました。昨年 11 月，「こころの時代」という番組で，僕らは，徐さんとパレスチナ・ガザの友人との対話を描いた過去の番組 2 本をアンコール放送し，ガザ問題をどう考えるべきか世に問うことにしました。一人はガザに暮らす人権弁護士のラジ・スラーニさん（『ガザに「根」を張る』2014 年 12 月 7 日），もう一人は，パレスチナを離れず抑圧される側に立って告発の記事を書き続けるユダヤ人新聞記者アミラ・ハスさん（『紛争の地から声を届けて』2017 年 12 月 3 日）です。徐さんに，「あの二つの対話を今こそ放送すべきだと思っているが，その映像に加えて，現在のガザについて徐さんが何を思うか，急遽インタビューして加えたい」と連絡したところ快諾され，信州茅野のお宅から東京まですっ飛んで来ていただきました（インタビューは 2023 年 11 月 5・12 日，『アーカイブ・シリーズ　ガザに暮らして』全 2 回で放送）。

徐さんは，ガザの問題を政治的な問題であるとか宗教的な対立の問題であるとか表面的にとらえるのではなく，根底的な植民地主義の問題であり，そこに暮らす人間の声に耳を澄ま

さねばならないと警告しています。10 月にガザ攻撃が始まって以来，徐さんは敬愛する友人のラジ・スラーニさんの安否を大変心配していました。その後の消息で，今はかろうじてカイロへ脱出することができ，イタリアの弁護士とともにネタニヤフ首相の戦争犯罪を告発する準備を進めていると聞いています。

徐さんとラジさんの関係は，2003 年に始まりました。僕は徐さんからエドワード・サイードの思想の重要性を何度も教えられてきたのですが，実はラジさんはサイードの親友なんです。そんな導きもあって，僕はエジプトのカイロで，サイードとラジさんの対話を番組にしたことがあります。それは，イラク戦争開戦という戒厳令下でのロケとなりましたが，その渦中で撮影した対話で構成したものです。徐さんもカイロにお連れしたかったのですが予定が合わず，とても残念がっていました。その半年後にサイードが亡くなり，9 月にラジさんが沖縄にやって来た。もうサイードはいませんが，カイロでのサイードとラジさんの対話映像を随所に挟みながら，それを受けて徐さんがラジさんと対話する，という，ちょっと時空を超えた感じの「鼎談」を作ろうと思いまして，佐喜眞美術館でお二人の対話を撮りました。以来のご関係で，2014 年，ガザが大規模攻撃を受けた後も，ラジさんは再び来日し，徐さんと旧交を温め，対話されています。

僕のことをお話しますと，徐さんとの最初の出会いは 1999 年でした。当時，僕はスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ――2015 年にノーベル文学賞を受賞しますが，当時はほとんど無名だった作家のドキュメンタリーを撮っていました。彼女を日本にお招きする機会があった時，この会場にもいらっしゃるプロデューサーだった桜井均さんに，「この機会に，きっちり話を聞ける人との対話の番組も作ろう。徐京植っていう人がいるんだよ」と教えられたんです。桜井さんは，徐さんの友人だった高橋さんや鵜飼さんと交流されていて，おそらくその関係から徐さんを知り，著作も読まれていたんでしょうね。そんな次第で，池袋の喫茶店で徐さんに初めてお会いしました。怖い人でしたね（笑）。剃刀のような。

その対話番組（『破滅の 20 世紀――スベトラーナ・アレクシエービッチと徐京植』，NHK 教育，2000 年 9 月 4・5 日）を放送したすぐあと，2000 年だと思いますが，徐さんは東京経済大学に職を得て国立市に引っ越して来られた。僕も国立に暮らしておりますので，ご近所同士となり，以来ずっと家族ぐるみでお付き合いさせていただいてきました。

徐さんと高橋さんが『前夜』という批評誌を立ち上げられた折は，この会場にいる中野英世カメラマンと僕が，ドキュメンタリーについての連載の執筆を頼まれて，『前夜』最終号まで書かせていただいたということもございました。

徐さんが信州茅野の山あいに家をもたれたときは，行ってみると，そこは僕の父の故郷の村から 10 分も離れていないところでした。僕が幼少期，盆暮れ正月に遊び回った故郷です。不思議なご縁を感じたんですが，そこから徐さんは毎年，僕に桃を送ってくれました。それにはわけがありまして，僕は名古屋が NHK の入局初任地だったんですが，徹夜が続く過酷

なドキュメンタリー番組班に配属され，ある日，とうとう足が立たなくなった。たまたまその時の僕の下宿の一階が八百屋さんで，そこまで這って行くと，八百屋のおばさんが桃をひとつ剝いてくれたんです。それを食べたら本当に生き返った。足も立った。かろうじて死なずに済んだみたいな話を徐さんにしたら，以来，桃を送ってくれるようになったんです（笑）。

徐さんの最後のお歳暮は林檎でした。とても美味しくて次から次へと食べていたんですが，徐さんが亡くなったときに残っていたのはひとつだけ。何だか惜しくて「あぁもうこれは食べられないな」と最後まで手を伸ばすことができませんでした。

茅野のお宅でのお別れの時に印象的だったのは，徐さんが横たわるベッドサイドに，読みかけの一冊の本が亡くなった時のまま置かれていたことです。『ベートーヴェン』という古い岩波新書（1938 年刊行）でした。著者の長谷川千秋は作曲家でしたが，36 歳で沖縄戦で命を落とした方で，最後は目も見えず耳も聞こえなくなって，戦友に腰ベルトをつかまれて戦場を彷徨ったということです。そのような人が書いたベートーヴェンから徐さんは何を読み取ろうとしていたのか，僕はこれから考えてゆきたいと思っています。

最後に，今後のことを少しお話します。徐さんとともにイタリアのトリノやアウシュヴィッツを旅して作った『アウシュヴィッツ証言者はなぜ自殺したか――プリーモ・レーヴィへの旅』（NHK 教育，2003 年 2 月 5・6 日）というドキュメンタリーがありますが，これがギャラクシー賞年間グランプリを受賞した番組だったこともあって，今年，NHK でアンコール放送する企画が進んでいます。また，2008 年にサバティカルでソウル滞在中の徐さんを訪ねて作った『離散者として生きる』（NHK 教育「こころの時代」，2008 年 4 月 6 日）という番組では，徐さんが自身の人生を赤裸々に語っておられるのですが，これが今年 5 月，韓国仁川の国際映画祭で招待上映されます。集まった世界の方々に徐さんのメッセージが伝わる機会となり，幸いに思います。この番組の中で徐さんは，「プリーモ・レーヴィは自分にとっての尺度」と語っていますが，僕にとってのこれからの「尺度」が徐京植であることは揺るぎないと思います。番組を作り続ける上での道標，かけがえのない友人としての徐さんの愛情は，これからも僕を支える「尺度」になり続けてゆきます。ありがとうございました。

徐京植先生を慕って

崔 在 爀

2011 年，『越境画廊――私の朝鮮美術巡礼』を皮切りに，徐京植先生の文章をハングルに翻訳している崔在爀と申します。徐京植先生を追悼する席に呼んでいただき，大変光栄に思います。日本の皆さんが集まる場なので，円滑な進行のために日本語でお話しすることも考

えましたが，韓国語／朝鮮語でお話しすることになりました。これはもちろん日本語能力の不足という理由も大きいですが，何より私が徐先生と交わした対話のほとんどが韓国語／朝鮮語だったからでもあります。先生に対する思いを最もよく伝えられる私の母語で話すことをご了承ください。翻訳を担当してくださった李杏理さんにも感謝いたします。

徐京植先生が私たちの側を離れてからもう 4 ヶ月近くになります。昨年 12 月 19 日の午前，電話の向こうから舩橋さんの哀しい声を聞き，翌朝急いで茅野へ発ち，ベッドの上で安らかに眠るように横になっている徐京植先生にお目にかかりました。つい 3 日前に新刊出版と関連した訪韓の日程，ブックトークと記者会見について先生と電話でお話したばかりだったため，信じられませんでした。訃報のお電話をいただく数時間前まで，私は徐先生が E メールで送ってこられた文章『私のアメリカ人文紀行』のエピローグを翻訳していたため，なおさら信じられなかったのです。あまりにも突然の別れでした。飛行機の切符を買って長野に向かうことに精一杯で，先生をお送りする哀しみに打ちひしがれ，きちんとした御挨拶の言葉さえ準備できなかったのです。この時，韓国からは 9 名が葬儀に参列しました。大きな喪失感と哀しみを共有しながら，お互いの心を分かち合うことができたため，その後も会い続けて先生の意思を受け継いでいくために，さまざまな企画をしようと尽力しています。すべて徐京植先生が繋いでくれた大切な縁だと思います。できれば今日はその方々を含む韓国の友人たち，『徐京植　回想と対話』（高文研，2022 年）で澁谷知美さんが語った韓国の「徐京植スクール」の心と声もこの場を借りてお伝えしたいと思います。

私は葬式を終えて韓国に帰ってくるやいなや，徐京植先生の遺作になってしまった『アメリカ人文紀行』の翻訳原稿の仕上げと校正をしなければなりませんでした。しかし，徐先生の人文紀行がアメリカで終わってしまったという現実を受け入れるのに多くの時間がかかりました。この本に掲載した翻訳後記は，今まで私が書いたどんな文章よりもつらく，哀しみの中で書いた文でした。その文章の中で，私は徐京植先生を記憶し，彼の不在を惜しむ韓国の多くの読者に 2023 年 12 月 21 日，葬儀で舩橋裕子さんが弔問客になさった御挨拶も伝えなければならないと思いました。簡単に要約すると，次のような内容でした。

「彼がもう少し生きていたら，きっと人びとの役に立つようなことをもっとしたと思うと，残念でなりません。一方で，彼は「人間であることの罪」にずっと苦しめられた人でした。毎日がそれとの闘いでした。ようやくその闘いから抜け出せたのかも知れません。死によってその重みを手放したんだと思います。「お疲れ様でした。やっと楽になりましたね。本当にお疲れ様でした。」と言ってあげたいです。皆さんのおかげで，彼は頑張ることができたと思います。」

人間であることの罪――この言葉がもしかすると徐京植という在日朝鮮人の生を象徴しているのではないかという気がしました。徐京植先生がひとつの尺度としたプリーモ・レーヴ

ィも述べたことです。『周期律』でアウシュヴィッツ生還後の日々を語り，レーヴィは「人間であることから感じる罪悪感」について述べました。徐先生の重要な著作『プリーモ・レーヴィへの旅』（朝日新聞社，1999 年，新版：晃洋書房，2014 年）も，なぜ恥を知らない加害者の恥までも被害者が全部受け止めて苦しまなければならないのか，なぜその不条理な顚倒が起きるのかについて苦悩する文章だったと思います。

葬儀場でこの言葉を聞いて，私は『アメリカ人文紀行』がなぜあれほど長い連載期間を持たなければならず，徐京植先生はなぜ「おわりに」の文章を書くのがそれほどまでに辛いとおっしゃったのか，一足遅れて悟ることができました。『アメリカ人文紀行』は 2019 年 9 月に第 1 回連載が始まりましたが，2020 年 11 月に最終章を残して休載が決定されました。結局，絶筆となったエピローグは，亡くなる前日になってようやく完成することができました。その間，2022 年 2 月にロシアによるウクライナ侵攻が始まり，2022 年 7 月にはミャンマーの軍部によって民主化運動家 4 人が電撃処刑をされましたし，特に 2023 年 10 月からはガザ地区で恐ろしい殺人が続きました。そのような事態が徐京植先生に及ぼした心理的打撃は私の予想をはるかに超えていました。この時期に徐京植先生は『アメリカ人文紀行』を完成させることはできませんでしたが，その代わり，韓国のハンギョレ新聞のコラムを通して「ますます悪くなる世界」，理想は消え，そこには戦争と苦痛があり，「陳腐化」している，そんな世界に向けた憂慮と警告を休むことなく発しました。私は彼の翻訳者であり編集者であるという自負心と責任感から，徐先生の文章を欠かさず読みました。それでも正直に告白すると，「徐京植先生らしい，徐京植先生だから書ける文章だな」と思い，いつの間にか少しずつ鈍感になっていたようです。あるいは，自分のレベルでは到底たどり着けない「徐京植の感覚」と自らに弁明しながら。

徐京植先生が去った今になって，いつかされた「カナリアの歌」に関する話を思い出し，胸が痛くなりました。カナリアは人より先に一酸化炭素の濃度に反応するため，鉱夫が坑道の中に連れて入っていくそうです。カナリアの最期の歌は先に苦痛を感じながら，死によって危険を知らせる悲鳴でもあります。徐京植先生は，危機に見舞われたとき最も敏感に反応して，警告する役割を付与された在日朝鮮人と，それから自身の文章をカナリアに例えたことがあります。香港，ベラルーシ，ミャンマー，ウクライナ，パレスチナで行われている残酷なことが，時が経つにつれ陳腐に感じられるように，徐京植先生の書き物と心まで私の中で陳腐化されてしまったのか。カナリアの悲鳴を聞き流したのではないだろうか，そんな思いで今も心がずきずき痛みます。

他者の苦痛に対する想像力にひときわ敏感だったディアスポラ知識人の人文紀行は，もともと計画していたドイツ，フランスへとつながらずに終わってしまいました。その最後の道を進みながら，私は旅行と関連して以前徐京植先生が残した文の中で好きないくつかの文章を探して読みました。小説家・多和田葉子さんと交換した書簡集に寄せた文章です。

私は現在も落ち着きなく旅を繰り返していますが，それは日常からの解放ではありません。「居住」を求め続ける放浪のようなものです。年齢とともに旅をするのが負担になってきました。しかし，旅に出られなくなったとしても大きな違いはないでしょう。私にとっては日常の「居住」もまた旅のようなものですから。では，ボン・ボヤージュ（よい旅を）。（『ソウル－ベルリン 玉突き書簡――境界線上の対話』岩波書店，2008 年，pp. 47～48）

徐京植先生はもう側にいませんが，居住も旅行も同じようなものだった彼の人生と旅程が長く記憶されるよう，全うすべき責務が私たちに残されていると思います。

先生がこの世を去り，韓国ではいろいろなイベントが行われ，新聞や雑誌などのメディアだけでなく，個人の SNS，書店のホームページの追悼インターネット空間に読者の書き込みや言葉がぎっしりと埋まりました。私はこれがひとつのアーカイブであると考え大切にしまっておきました。その中から知人たちの言葉をいくつかお伝えします。

訃報の声を聞いた瞬間，呆然とするとともに途方に暮れ，瞬間的なパニック状態に陥った。それは痛切な悲しみよりは茫然自失に近い感情だった。今まで私を支えてきたある堅固な精神，常にインスピレーションと深い余韻を与えた「人間図書館」が一瞬にして世の中から消えた感じだった。［中略］常に希望と楽観よりは深い悲観と絶望を凝視していた彼の正直な態度から，かえって勇気をもらい希望に向かう灯火を見出す人が多かった。「私は不幸に暮らしていながら，不幸だという話もできなかった人びとの側に立ちたいです。」と言った徐京植先生の態度と視座は少数者という意識すら持つことができなかった疎外された人の心に切実に迫ってきたのではないか。（文芸評論家 権晟右）

20 代のある日，後ろ手を組んで歩く後ろ姿が印刷された表紙を見ながら，大きくて暖かい岩のようだと思って徐京植の文章を読み始めた。その後続いた「徐京植読み」が私にはいつも，その後ろに着いていっているという安全な感覚と共に，少し自覚的に奮い立たせる力を与えてくれた。何よりも徐京植の言葉と文章が私にはディアスポラを体感できる最も身近な通路だった。今でも。

著者たちが幽明境を異にしたという知らせを聞いた時，編集者は一斉に悲しみの後に訪れる奇妙な活気を感じる。著者の時間はなによりも，彼ら自身の肉体的な死で終わらないからだ。長い間私たちと共にした徐京植先生に対する追慕の紙面をつくる心もまた，哀しく力強い。徐京植先生が書いた文章によって新しい生を始める誰かの著者であるからだ。（編集者／文芸評論家 パク・ヘジン）

安住しよう，安定しようとする人びとに不安定な感覚を反芻させることを使命にした方です。何か忘れたい時，ああもう根付いたんだと，気だるくリラックスした気分に酔いしれる時，徐京植先生の言葉と文章を思い出してみることにします……そのように記憶し，哀悼します。（編集者 キム・ヒジン）

そして，徐京植先生に対する恋しさと慕う気持ちを分かち合った席で，徐京植先生の長年の知人である哲学研究者コン・ヨンミンさんが放った言葉が皆の共感を集めました。それは「親切な人，徐京植」という言葉でした。

彼はいつも親切な人たちが連帯できるように橋になることを自任した。「先生は誰が誰と会えばいいのか，誰と会って対話すれば新しい地平を開くことができるのか，その人がどんな本に会えば役に立つのか考えた」［中略］ある人は徐先生を「正しい」，「当為的正当性」に傾倒して現実を逃したと言い，ある人は運動論理に陥ったまま妥協の代わりに闘争だけを叫ぶ者と言うが，私にとって先生は正しさの代わりに親切を選択した人であり，急進的親切さによって現実の妥協的論理で作られた利益／許し／希望などと「親切」を交換しようとする人たちに対して断固として対抗した方だ。「あまりに正しすぎる徐京植は正しすぎて問題だ」という人に，その正しさの核心には親切があったということを何としても言いたい。どんな人であれモノにされてはいけないという，いわば植民地主義の心性に対する抵抗としての親切。誰かが先生を評する文章で，徐京植は文学的にも政治的にも立派な作文の模範を示したと書いたが，私は先生の親切さ，親切さの思惟，親切の急進性がまさにそのような模範を成就させたということも見逃してはならないと強調したい。（コン・ヨンミン）

徐先生が亡くなった後，初めて先生のいないブックトークが開かれました。権晟右さんが自分の好きな先生の文章を選んで参加者たちと分かち合い，肉声で朗読した席が特に記憶に残ります。そこでまだ徐先生の文章を読んだことのなかった参加者がこんなことを言いました。「今まで私にとって徐京植はいない存在だったが，今日彼の文章を朗読して聞く場を通じて『ある存在』になりました」。

最後に先日の葬儀に参列した9名が，連絡のために今も続けているグループチャットの名前を紹介したいと思います。ふたつの名前を一緒に使っています。ひとつは「徐京植スクール」，そしてもうひとつは「徐京植の幽霊たち」です。イ・ジョンチャンさんが雑誌に書いた追悼文の最後の文章，「先生は去られたが『徐京植の幽霊たち』は残存する。まだ終わっていない」から取った言葉で始まりました。「幽霊」はいつか徐京植先生がなさった言及ともつながります。徐京植先生は過去を記憶する「ノスタルジア」をあえて否定せず，権力と

不正，無自覚に抵抗する武器にしようと提案しました。そしてある対談で，「私は歴史に，過去にしがみつく人だということを恥ずかしく思いません。誰かが私に『過去の幽霊，亡霊』が蘇ってきたような感じだと言った時も納得しました」（哲学者キム・サンボンとの対談，『出会い』トルペゲ，2007 年）とも語っていました。

幽霊の意味が少し違ってくると思いますが，過去を記憶することで現在と戦っていく力を得て，未来を見通す人物だった徐京植先生を記憶し，彼の意志を知らせる人びととして喜んで「徐京植の幽霊たち」として生きていきたいです。

ありがとうございます。　（李杏理訳）

本の中に帰って行った徐京植さん

大田美和

昨年 12 月 19 日，横浜で，アフガニスタンからオランダに亡命している詩人ソマイア・ラミシュさんを囲んで，詩の力，詩人の社会で果たすべき役割，女性の地位について対話集会を開きました。その帰り道に，駅のプラットホームでスマートフォンを開いたところ，同僚の榎本泰子さんからメールがあり，徐京植さんの急死を知りました。

信じられない思いでした。徐さんには，この日のイベントの手応えを真っ先にお伝えしたかったのです。しかし，この知らせを榎本さんが伝えてくれたことは，いかにもふさわしいことで，天に感謝したい思いに満たされました。榎本泰子さんは，2016 年に「アートとドラマから見る韓国」という中央大学文学部主催のシンポジウムを開いて，徐京植さんと韓国のアーティスト　ヂョン・ヨンドゥさんとの対談を東京で実現した方だからです。

12 月 21 日，信州のご自宅で，徐さんは静かに眠っているような姿で，ベッドに横たわっていました。私は，ご遺体がお骨になっておうちに帰るまで丸一日ご一緒して，亡くなったという事実を受け入れることはできましたが，大切な人の早すぎる喪失ということに慣れるまで，かなりの時間がかかりました。徐さんにお世話になった教え子たちや，詩人のぱくきょんみさん，作家の黄英治（ファンヨンチ）さん，韓国・仁川在住の作家の戸田郁子さんなどの友人たちに，徐さんのご逝去とお別れの様子を伝えて，悲しみを分かち合いました。

そのような年の暮れに，レクイエムを聴きたいと思って選んだのは，ヴェルディのレクイエムでした。好きな曲ですが，オペラのように絢爛豪華で，死者を叩き起こすのではないかと思われるほど太鼓が連打され，歌手たちが競うように歌う曲です。今悲しみに打ちのめされている自分が，なぜこの曲を選んだのだろうと訝しみながら聴いたところ，タルコフスキーの映画『ノスタルジア』で有名になった冒頭部の静謐で美しい響きに，あらためて打たれました。さらには，徐さんとイタリアの浅からぬ縁，『プリーモ・レーヴィへの旅』（朝日新

聞社，1999 年，新版：晃洋書房，2014 年）を思い出しました。

私は徐さんとはわずか十年ほどのお付き合いです。私がお送りした何冊目かの本がたまたま徐さんの目に留まり，お手紙をいただいて，交流が始まりました。メールのやり取りで，「友情に感謝します。友情といっていいですか？」とお尋ねしたら，「よろこんで」とお返事をいただきました。徐さんの国内外の講演や対談を聴きました。中央大学の私の授業にゲストとしてお招きしました。東京経済大学とご縁ができて，何度か授業をさせていただきました。ベルリンの国際尹伊桑協会の会長ヴァルター・ヴォルフガング・シュパーラーさんや，沖縄の佐喜眞美術館の佐喜眞道夫館長にご紹介いただきました。ドイツに出張したときには，徐さんのご著書『汝の目を信じよ！――統一ドイツ美術紀行』（みすず書房，2010 年）を持って，いくつもの美術館を回りました。あの本は素晴らしい旅の道連れでした。

昨年，私はイギリスのマンチェスターに 3 か月ほど滞在して，大学や美術館の様子，徐さんが『ウーズ河畔まで――私のイギリス人文紀行』（論創社，2021 年）で書かれたオルドバラの音楽祭に出かけたことなど，メールをお送りしては短いお返事をいただいていました。帰国後，徐さんにすぐお会いしたいと思いましたが，「もう少し元気になってからご連絡します」というお返事が何度もありました。

最後のメールは亡くなる一週間ほど前に，青森県立美術館の「奈良美智：The Beginning Place ここから」展に，香港大学の美術史の教授が講演する日に合わせて，ご一緒しませんか？と私が誘ったメールに対するお返事でした。「二月の一番寒い時期に東北まで行くのは，今の体力では無理だと思うけれど，これに懲りずにまた誘ってほしい」というお返事でした。それより前のメールでは，詩人の高細玄一さんが第二詩集『もぎ取られた言葉』（コールサック社，2023 年）で，詩のエピグラフに徐さんの「詩の力」（『詩の力――「東アジア」近代史の中で』高文研，2014 年所収）の一節を引用していることをお知らせしました。昨年 10 月以降のイスラエルによるガザ侵攻，第二のナクバについてのやり取りもしました。徐さんからのお返事には，ベンジャミン・ブリテンの『戦争レクイエム』の「ああ，いつまで，いつまで」という嘆きの言葉が引用されていました。

世界が一層深い闇に包まれているときに，徐京植さんという詩人の心を持つ作家・思想家がいなくなってしまったという喪失感は，消えることがありません。しかしながら，最近，私は，あることに気づきました。それは，徐京植さんは元々本の中にいた人で，長年私は本の中の徐さんと対話してきたこと，徐さんが亡くなっても，その対話は終わらないということ，本の中にいた徐京植さんが，また本の中に戻っていっただけなのだと，気づいたのです。

本を開けば，徐さんにいつでも会えるのです。本の中に徐さんの言葉は生き続けています。徐京植さんの言葉は，決して古びることがありません。たとえば，今年 2 月に日本政府が「永住者」の在留許可を得た外国人について，公的義務を果たさない場合には，在留資格を取り消すことができるようにする法改正の検討を始めたという報道がありました。そのとき，

私の念頭にすぐに浮かんだのは，徐さんの言葉でした。徐さんが何度も見た悪夢，外国の旅から帰国した日本の空港で，知らない間に日本の制度が変更されていて，「あなたは入国できません」と言われたという悪夢です（徐京植『ディアスポラ紀行――追放された者のまなざし』岩波新書，pp. 168～170）。徐さんの言葉と思考は，他者の置かれた状況に対する想像力の回路を，今後も開いていってくれることでしょう。

私にできることは，徐さんの言葉と思考，徐さんが美術や音楽や文学を通して見た社会と世界に，まだ出会っていない人たちに，出会うきっかけを作ることだと思います。大学の教壇に立っているかぎり，生きているかぎり，続けていきます。

最後にお知らせです。あさって 4 月 22 日月曜日の夜 7 時半から，大久保のライブハウス「ひかりのうま」で，特別公演「ガザ・パレスチナへの詩と歌」を開催します。私は短歌と詩を朗読します。これは，徐京植さんを通して教わった，パウル・ツェランの言葉「投壜通信」の実践です。今日この集会から力をいただいて，今自分にできる精一杯のことを行ないます。詩は今続いている恐ろしい状況を瞬時に変えることはできませんが，未来に備えることはできます。徐さんの「詩の力」の一節を，この朗読イベントの発起人である白拍子ダンサー・作曲家の桜井真樹子さんと分かち合いました。詩人とは，損得や効率性を考えずに，正しいことを言い続ける人なのだという言葉です。徐京植さん，空の上から，私の精一杯の行動をどうか見守り続けて下さい。ありがとうございました。

徐京植さんを悼んで

李 杏 理

徐さんと初めて会ったのは，私が帰化をするかどうか悩んでいた高校生の頃に，NPO 前夜の講演を通じてでした。年季の入った代々木区民会館の片隅で，どっしりとした体から発せられる重厚で，哀しみを折り畳んだ独特の声，打ち震えるような語りに圧倒されました。李珍宇という，殺人と性犯罪の容疑で死刑が執行された少年の壮絶な家庭環境や，読書家で詩的でもある李珍宇の類稀なる個性をつかまえて，忘れられた記憶を呼び起こしていました。また，当時の新聞の論調や大島渚の映画『絞首刑』（1968 年）から民族差別，女性蔑視，障害者差別の問題を炙り出していました。

徐京植さんが居たから，私は附属高校で内部進学する道を捨て，東京経済大学に入りました。

徐さんは，いろんな学生の個人史や自己開示を促す，名インタビュアーでした。徐さんの研究室にはいつもかりんとうやチョコレートが置いてあって，ことあるごとに配って話を引き出してくれました。その頃憶えているのは，私の家族の話，日本人の父と離別した母がス

ナックの経営をしていた話やアウトサイダーが出入りしていた話をした時に，こう言われました。「そういう環境で育ち，修羅場をくぐりぬけてきたあなただからこそ，ものすごく期待しちゃうな。あなたにしかない観点や書けないことがたくさんあるから」と。

いつだったか，「徐さんが最も影響を受けた本は何ですか」と聞いたところ，サイードの『知識人とは何か』（大橋洋一訳，平凡社ライブラリー，1998年）だとおっしゃいました。サイードにとって，サルトルやラッセルを読むと，その存在感が強く迫ってくるのは，彼ら知識人の論じ方にあるのではなく，彼ら特有の個人的な声であるとしました（p. 40）。まさに，徐さんもそんな個人的な声の持ち主でした。当然声質だけでなく文章にも独特のリズムと個性がありました。人間や社会，美術にも一隻眼がありました。私は，徐さんのようになりたくて，語りの力を手に入れたくて，徐さんの文章や講演録をお守りのように唱えました。

「母を辱めるな」の一節より（『半難民の位置から――戦後責任論争と在日朝鮮人』影書房，2002年所収）。

> 私自身も幼い頃，子どもどうしのケンカになると最後にはかならず「チョーセン，チョーセン，帰れ，帰れ」とはやされた。〔中略〕なぜ「チョーセン」である自分がこの日本にいるのか，どこに帰れというのか，何もわからないまま，泣くまいとして口をへの字にまげて帰宅すると，何も言わないうちに母はすべてを見通して，無条件に，ただ無条件に私を抱き締めたものだ。ことの経緯を聞くでもなく，ケンカの理由を問うでもなく，理由の如何にかかわらずケンカはいけないなどと退屈な市民道徳を諭すこともなく，ただ無条件に私を抱き締め，母は低い声で私の耳に何度も何度も繰り返した。
> 「チョーセン，悪いことない，ちょっとも悪いことないのやで」
> その母の力で，私はまた，真っすぐに立つことができたのである。（p. 33）

元「慰安婦」の宋神道さんのことを母と重ね合わせた記述の後で，終盤はこうです。

> この身勝手な息子が，今度は，無条件に母を抱き締めるべき時なのだ。〔中略〕母に向かって投げ付けられる石つぶてをこの身で受けとめながら，「正史」が黙殺し隠蔽してきた母たちの歴史のために，母たちとともに，また母たちに代わって，息子である私が声を発さなければならないのである。文字なんか覚え，知らず知らず心身を「知識」に侵されてしまったこの息子は，もはや母たちのようにひたすらに無垢であることはできないが，せめてその文字と「知識」を振り絞って，母たちを抱き締める力に変えたいと思う。（pp. 34～35）

この，「母たち」が「ひたすらに無垢」であるかなどについては疑義がありますが，私は

この文章を自分のこととして読みました。というより，この文体によって心の奥底に呼びかけられて，迫られました。徐さんの文章はいつも，終盤に向かって畳み掛けるように，強く迫ってくるのです。しかも徐さんは，自分の弱みを曝け出すことによって読者を惹きつける力がありました。

サイードは，知識人の具体的な姿や特徴，現実への介入のしかた，その行動に関する情報をまとめて現実の知識人のなまなましい姿もまた記録されるべきだとしました。また，サルトルのことを「彼とても人間的なあやまちとは無縁ではなかったこと，彼が道徳的題目ばかりをならべるような説教者とはちがっていたことをおしえてくれる」（p. 41）とします。徐さんも，以前，弔辞や追悼文において亡き人を美化するだけではなく，人間性や欠点も含めて描くのがよいとおっしゃっていました。なので，徐さんの人間性と違和感についても触れたいと思います。

徐さんは，当時大学院生の私が民族団体の新聞のコラムなどを書くと，欠かさず読んでコメントしてくれました。「一度反響がよかったからって安心しちゃダメだよ，ホームランを打ち続けなければならない」，「杏理さんは結論として書くべきことを拙速に書きすぎるきらいがある。自分の抱いている意見を，自分はどのようにして抱くようになったのかを，読者に伝わるように紐解いて，つまびらかにする必要がある」と，私の可能性を引き出そうとしてくれました。また，TA として徐さんの研究室に伺うたびに，お母さんは元気か，生活費は足りてるか，一橋で孤立していないか，そんなことをほとんど毎回気にかけてくれて，実際に助けてくれました。

徐さんとの自主ゼミで，李珍宇について議論した日，徐さんは私にこう問いました。「民族差別を決定的な背景としながら社会への鬱憤を溜め込み，性犯罪をしたかもしれない李珍宇について，フェミニストのあなたはどう思うのか。民族とジェンダーどちらに軸足を置き，どちらを重視するのか」と。私は李珍宇がした行為の社会的背景については同意しましたが，だからといって民族だけでなくジェンダーも重要な悩みの種であり課題のため，なんとも答えられませんでした。世代的な限界といえばそれまでですが，自分を構成する要素のうち，何を重視するか，何を後回しにしてよいのか，選べることがすでに特権です。人が置かれた複合的な要因を無視してシングルイシューに絞る選択を迫ることは，徐さんが言語化してきた自己分裂を加速させることではないでしょうか。

さらに博士論文を終えて，どのように社会批評や研究を続けたらいいか相談した際に，「スナックのママをやったらどうだろ？　才能あると思うんだけど」と薦められたことの違和感はご本人にも伝えました。ナイトワークだから悪いのではなく，研究や執筆に関連する仕事ですらなく，「女」だからこそ薦めるというのが，ジェンダー・ハラスメントにあたります。それに加え，自分だけの部屋と時間をもって絶えず批判を投げかける知的営みが困難になるからです。とはいえ，聖人君子や一人のカリスマ性を求めることが誤りであり，欠点

や限界も備えた個々人がどう行きつ戻りつ批判的に連帯したり人間総体として関わっていくのかが大切だと思います。

最後に，「母を辱めるな」冒頭のイザヤ書53章の一部を読みます。「誠に彼は我々の病を負い，我々の悲しみを担った。しかるに我々は思った。彼は打たれ，神にたたかれ，苦しめられたのだと。しかし，彼は我々の咎のために傷つけられ，我々の不義のために砕かれたのだ」。

徐京植ソンセンニム，私たちの代わりに悲しみを背負い，どこまでも批判を投げかける姿を見せてくれたことに感謝します。そして，数々の不義理を謝罪します。今度は，この身勝手な私が，虐げられる人びとに投げつけられる石つぶてをこの身で受け止めながら，「正史」が黙殺し隠蔽してきた母たちの，娘である私が声を発さなければならない時です。忘れられた人間の記憶を呼び起こし，危機の瞬間にひらめきをもたらす，知識人としての責務を全うします。だからどうか，ハヌル（空）で思い切り羽を伸ばして，南北の朝鮮も宇宙も自由に行き来しながら，寄る辺のない人たちを見守っていてくださいね。

徐京植さんから受け継いだもの，受け継ぎ損ねたもの

早尾貴紀

今日，徐京植さんを偲んで集まったみなさんには，自分にとっての徐京植さんの顔，存在，徐さんとの関係がそれぞれにあると思います。そうしたなかで，親しかった同僚として主催者にもなった私は，同僚としての10年強という時間以上に，徐さんと長い付き合いがありました。私が本学に着任する前からというだけでなく，徐さんが本学に着任されるよりも前のことになります。ということは，当然私は，知り合った当時まだ学生であり，徐さんを仰ぎ見るようなところから始まりました。

1998年の頃だったと思います。のちに『断絶の世紀　証言の時代――戦争の記憶をめぐる対話』（高橋哲哉氏との共著，岩波書店，2000年）としてまとめられることになる，今日も登壇された高橋哲哉さんとの連続対談の「聞き手」として，私は毎回参加し，文字どおり徐さんの謦咳に接しました。当時私は仙台在住の学生でしたので，対談後の毎回の会食は早めに退席せざるをえなかったのですが，テーブルに並んだ料理から徐さんが自ら折詰を作っては「帰りの電車で食べなさい」と私に持たせてくださったものです。

それ以後，私が運営していた市民グループでの講演会や対話集会に徐さんを招いたり，私が支援していた元「慰安婦」の裁判傍聴に誘ったりして，親交が深まっていきました。地方に住む一人の若輩者のお願いを，徐さんはいつも丁寧に聞いて応答してくださいました。2000年と2002年の二度にわたって仙台で開催した長時間の対話集会の記録は，『秤にかけ

てはならない――日朝問題を考える座標軸』（影書房，2003 年）に全文収録され，「これはあなたの取り分だよ」と刷りたての書籍を段ボールで一箱，50 冊ほど渡されたときのことをありありと思い出します。

2006～07 年度，徐さんはサバティカルで韓国の聖公会大学に行かれるときに，本学の授業「グローバリズムと民族問題」の穴埋めとして，私に非常勤講師を頼んでこられました。私なんかに徐さんの代役が務まるかとたいへんなプレッシャーではありましたが，徐さんは私に教育の経験を積ませようという意図もあったのでしょう。「教室では学生に言いたいことを言うだけではダメだ。それは自己満足にすぎない。研究の言葉のままでは伝わらないよ。学生にどう話せば伝わるのかを考えて」，そんな助言を残していかれました。

その後，2011 年 4 月に私は本学に専任講師として着任することになりましたが，その直前の同年 3 月 11 日に始まる東日本大震災の被災者でありながら被災者支援活動にも忙しかった私を，徐さんは細やかにフォローしてくださいました。その直後からの災害復興ナショナリズムや原発・核政策の迷走を，徐さんは東アジア史に生きるマイノリティとして深刻に受け止めていました。そして私に対しても，「あなたの被災・避難移住の経験を普遍的な言語で表現するように努めなさい」と言って，翌 2012 年には，韓国・陜川（ハプチョン）での国際シンポジウムに連れて行ってくださり，「韓国のヒロシマ」と呼ばれる在韓被爆者がたくさん集まって暮らしている陜川での交流やチェルノブイリ事故経験者との対話の機会を作ってくださいました。また，韓国で原発の写真を撮り続けている写真家・鄭周河さんが福島原発の被災地を取材された写真展を各地で開催する際には，私も研究予算を確保して，写真展とともにトークイベントを開催しました。それはのちに，『奪われた野にも春は来るか――鄭周河写真展の記録』（高橋哲哉氏との共編，高文研，2015 年）としてまとめられましたが，私もトークの参加者，また寄稿者として加わるなかで，たんなる原発事故被災者ではなく，「東アジア冷戦と核政策」という観点から自分の経験を省察することができました。

また徐さんにとっても，『フクシマを歩いて――ディアスポラの眼から』（毎日新聞社，2012 年）と『フクシマ以後の思想をもとめて――日韓の原発・基地・歴史を歩く』（高橋哲哉氏・韓洪九氏との共著，平凡社，2014 年）を出されているように，原発震災は「東アジアのディアスポラ知識人」としての徐さんにずっと重くのしかかっていました。

ディアスポラの知識人。私もユダヤ・ディアスポラやパレスチナ難民の研究をしていることから，いわゆるディアスポラ研究という分野に関わっています。私自身はヨーロッパ哲学からユダヤ思想，シオニズム，イスラエル建国問題へという関心の広がりでしたが，徐さんは在日朝鮮人としての実存に深く関わるかたちでユダヤ人やパレスチナ人の作家・詩人らに深い共感と洞察を持たれて，『プリーモ・レーヴィへの旅』（朝日新聞社，1999 年，新版：晃洋書房，2014 年）という名著を始め，数々の論考を残されました。この徐さんにおけるユダヤ人・パレスチナ人の存在については，徐さんの足跡をいっしょにまとめた『徐京植

回想と対話』（早尾貴紀・李杏理・戸邉秀明編，高文研，2022 年）の韓国版が刊行されたときに，ソウルでのその出版記念シンポジウムにおいて「徐京植の批評活動におけるユダヤ人とパレスチナ人――コリアン・ディアスポラと「新しい普遍性」の探求」として，私なりの徐京植論を徐さんご本人の前で発表しました（『日本學』第 60 輯，東国大學日本學研究所，2023 年掲載）。「韓国ナショナリズム」に回収されない越境的な「朝鮮」ないし「コリアン」としての民族主義を構想するうえで，徐さんはユダヤ・パレスチナの問題を誰よりも深いところで共鳴させていたと思います。

『徐京植 回想と対話』の序文として「徐京植さんとその時代――批評家として，活動家として，教育者として」で一つ徐さんに応答し，その韓国版刊行シンポジウムでもう一つ応答し，これからさらに徐さんとの対話を続けていくことができるだろうと期待していました。ご退職後も，私の住む甲府と徐さんの暮らす茅野とのあいだをお互い往復して会っていましたし，そのなかで徐さん自身このようにおっしゃっていました。「自分にはまだまだ語っていないこと，文字にはできないことがある。長く戦後思想に関わり，社会運動に関わり，かけがえのない出会いもあったし，残念な出会いもあった。傷つけまた傷つくことも多かった。あなたには折々にしゃべってきたこともあるけれど，まだまだいっぱいある。これは講演会とかでおおっぴらには語れないけれども，でもそれをあなたのような世代の人に，オフレコででも語り残したい。一回，二回では語りきれないし，連続企画で語って，私家版の記録にでもしておければ」と。

私はぜひそういう機会を持ちたい，ぜひ徐さんのオフレコ話を記録し残したい，そう思っていました。退職されて時間はたくさんある，と期待もして。でもこんなにも早くに時間切れが来るとは思っていませんでした。残念という言葉では表現しつくせません。大いなる損失となってしまいました。

しかし嘆いてばかりもいられません。徐さんが残された書物は，その意はまだまだくみ尽くされていません。徐さんの新しい言葉はもう加わってはいきませんが，残された書物が語りかけてきます。先ほど大田美和さんも徐さんの本と対話ができるとおっしゃられました。徐さんの本は私たちに問いかけてきます。何度読み返しても，新しい発見と刺激があり，そして反省と思索へと誘われます。そのようにして徐さんとの対話を続けていこうと思っています。

徐京植さん，ありがとうございました。おつかれさまでした。さようなら。でも，書物のなかで再会しましょう。

炭鉱のカナリヤ　徐京植

舩橋裕子

京植さんは韓国の彼を慕う若い人たちに，「炭鉱のカナリヤ」と言われていました。炭鉱のカナリヤとは，炭鉱に入る先頭の人が，カナリヤが入った鳥かごを持って有毒ガスがないかどうかを調べるところから来た表現です。カナリヤが鳴きやんだり，死んでしまったりするとメタンガス等有毒なガスがあると判断するのです。

彼も書いていますが，戦後政治において，ほんの少しのあいだ「日本もよい時代に進んでいくのかな」という時もありましたが，特にこの 20 年間，さらに福島の原発事故以降は，原発の再稼働，国会議員の不正行為等許し難い問題が続いています。さらに世界ではミャンマー，ウクライナ，パレスチナと，どんどん何人もの人々が殺されていっています。彼はこれらの惨事を見ながら，毎日「世界苦」だと言って，嘆きました。特にミャンマー軍によって民主化勢力の人たちが公開処刑されるニュースがネットに流れたときは，声をあげて泣き続けていました。

きっと彼の兄たちが韓国軍事政権に捕まって，一人は死刑，もう一人は無期懲役の判決が下された当時の事とも重なっていたんだと思います。彼はこういう時代を目の当たりにして日に日に苦しくなっていきました。まるで世界で起きている事が自分の責任でもあるかのように苦しみました。「自分には何もできない」「自分は無力だ」と言って嘆きました。

ここに，京植さんと私が共にした約 30 年間のエピソードを書き留めておきたいと思います。彼と一緒にいて凄く不安だったことは，海外に行った時にパスポート・コントロールを通過する時でした。スムーズに通過できる私と違って，彼は時間がかかるのです。何らかの理由をつけられて，何処かに連れていかれるのではないかという不安でした。日本に帰ってくる時もそうでした。このまま刑務所に連れていかれたらどうしようという思いでした。私はいつも連れていかれた時のシミュレーションをしていました。

もう一つの私の不安は，東京経済大学に就職が決まった時です。その時彼は文筆活動をしていました。また法政大学と立教大学で非常勤講師をしていましたが，当時京都に住んでいたのでお手当はほとんど交通費でなくなっていました。無職と言ってもいい彼がきちんと職業が決まって喜ぶというより，いつかナチスが台頭するような日本になって，彼が学生たちに「反日教師」として，バケツをかぶせられて，歩かされるのではないかという不安でした。

予想どおり，東京経済大学には「徐京植の様な反日的な人間が教師であってはならない」と電話があったそうです。幸い事務の方が慮って，対応してくださったと聞きました。

また彼は韓国の新聞『ハンギョレ新聞』に長く連載記事を寄せていました。『ハンギョレ

新聞』には日本語サイトもあり，Yahoo! にも記事が提供されていました。当然の事ながら，日本政府を批判します。そうするとたちまちネトウヨから必ず「そんなに，嫌いな日本なら，日本から出ていけ」という批判をされます。彼は日本を嫌いだと書いているのではないのです。そういう風にしか読めないネトウヨの方々の能力も疑問です。

彼と一緒に生活する中で少しずつ私にも「炭鉱のカナリヤ」的な感覚が移ってきたようです。

さらなる彼の苦しみは，朴正熙時代に反軍事政権，反独裁政権を表明し社会安全法に違反したとして軍事政権に逮捕され政治犯として捕まり，刑務所にいた兄二人に続いて韓国に行って自分も捕まらなかったことだと思います。自分の生き方は「嘘だ」という思いがあったように思います。

一方で彼のことを「家父長的」と批判する女性学者がいます。私は大学を卒業すると，他にしたい事がありましたが，経済的自立と両親からの自立を思って中学校の教員になりました。赴任した職場はとんでもない男性中心主義的な所でした。「かわいいお姉ちゃんコーヒー淹れてくれへんかな。」というような暴言が飛び交うような日常でした。とうとう頭にきた私は「かわいいお兄ちゃんコーヒー淹れてくれへんかな。」と返すような生意気な新任でした。この言葉を発した後，ほとんどの男性教員から反発されたのを覚えています。

こんな職場で奮闘していた私は，とうとう重い病気になってしまいました。この時を振り返ってみると，病気にかかってよかった。やっと休めるという思いでした。そして，その後様々なことに奮闘し，45 歳で教員を続けることを諦めました。体力が残っていませんでした。そして，これを期に教員を辞め京植さんと一緒に暮らし始めました。この様子を見たアメリカの女性学者が「京植さんが舩橋さんの仕事を辞めさせた」と言うのです。また，この後私の父が亡くなり，私は父の会社を継ぎ仕事をしていました。在日朝鮮人の男性が必ず「家父長的」だとか「男性中心主義」というのは何というバイアスのかかった見方でしょう！　この女性学者の知性と常識を疑います。彼と暮らしてみて，決して男権的な人ではありませんでした。むしろ民主的な人でした。

死をもっての彼との別れは，彼と一緒の生活の中でしょっちゅう想像していました。しかしこの別れは想像を超える哀しみ，苦しみです。いつかは何らかの形で別れが来ることはわかっていました。

私の父が亡くなったとき，よく私は泣いていました。彼はその時「僕が死んでもそんな風に君は泣いてくれるのかな」と泣くたびに言っていました。「僕が死んだあと，僕は君がどういう態度でいるか，見てみたいんだ」とも言っていました。この様に彼は自己愛の人でした。

この自己愛は決してエゴイスティックな自己愛ではなく，例えば日本軍によって性奴隷にされた女性達に対しては，自分の母への思いに膨らみ，世界中で理不尽な思いをしている全

ての人に対しては自分の苦しみとして受け取り，自分が男性としてまるで加害者かのような思いに至る感性の持ち主だったような気がします。

彼は，ほかの人たちからたくさん愛されたと思います。これが彼独特の自己愛です。自己愛が強いがあまり，自分以外の人も深く愛しました。彼のお葬式に来てくれた彼の若い友人が「こんなにも人の泣くお葬式は初めてだ」と言っていました。

戦争の絶えない混沌とした世の中で世界苦を背負い彼はますます鋭敏になっていきました。毎日が不安だったのだと思います。その不安と鋭敏さが彼にあのような文章を書かせたのだと思います。

私は彼の文章が大好きでした。その彼は逝ってしまいました。

炭鉱のカナリヤは，彼の死をもって解き放たれました。

（2024 年 7 月 7 日加筆）